

ライティング徒然草

エグゼクティブ・アドバイザー 林 健一

第15回 開発今昔物語(続き)

前回に続いて、昭和や平成の仕事のやり方を振り返ってみる。前回との一貫性をもたせるため、箇条書きの番号は通して振った。なにとぞご了承ください。

(4) 光磁気ディスク

1990年代末に Windows 95 が普及するまで、パソコンで作成したファイルのバックアップをとる際には、フロッピーディスク (FD) という記憶媒体を使用していた。これは磁性体が塗布された円盤をプラスチック・カートリッジに格納したもので、当初の円盤の直径は 8 インチもあったが、その後小型化が進み、最終的には 3.5 インチのものが主流となった。このため、机の引き出しに保管することも可能になった。ただし、記憶容量はたった 1.4 MB しかなく、1 枚に保存できるファイルは限られていた。

この問題を解決したのが光磁気ディスク magneto-optical disk で、「MO」という略語で呼ばれることが多かった。外観は FD とほぼ同じで、磁性体の保護に用いるプラスチック・カートリッジが FD よりも大きかった。記憶容量は 640 MB のものが主流で、操作方法は FD と同じである。このため、使い勝手がよいだけでなく、保管もしやすく、ファイルのバックアップ用に MO を使用する開発担当者も存在した。

問題は専用のディスク・ドライブが必要なことで、USB ケーブルを使って外付けの MO ドライブとパソコンを接続しないと、読み書きをすることはできなかった。Windows 95 が発表されると、コンパクトディスク (CD) へのファイルの書き込みが簡単になり、CD ドライブもパソコンに標準で内蔵されるようになったため、記憶媒体には CD が用いられるようになった。この結果、MO はその役目を終えることとなり、MO ドライブもオフィスから姿を消した。

問題が起こったのはその後である。当時、私は申請資料を作成する組織に所属しており、ある年に既承認品目の効能追加申請を担当することとなった。あろうことか、この品目の初回申請資料が MO に保存されていたのである (サーバーには資料が保存されていなかった)。ドライブがなければ MO は読めない。このため、私は社内の知り合いに片っ端から電話をかけ、MO ドライブが残っていないかどうかを確認する羽目に陥った (幸い、廃棄を免れた MO ドライブが 1 台見つかり、電源を入れてみると、無事に使用することができた)。

ちなみに、ミッション・インポッシブルの第 1 作でトム・クルーズ扮するイーサン・ハントが CIA から機密情報を盗み出す際に使用したのが MO である（このときの CIA は、外部からの接続を遮断した部屋で機密情報を管理する一方で、肝心のコンピュータには MO ドライブを接続していた）。ついでに言うと、ジョジョの奇妙な冒険の第 5 部「黄金の風」では、ギャング組織のボスの命令が MO に保存され、ジョジョたちに伝達される（このときのジョジョたちはノートパソコンだけで命令を読み取っている。イタリアでは MO ドライブ内蔵のパソコンが販売されていたのであろう）。

(5) 文字化け

Macintosh が登場すると、化学構造式やグラフを作成するためのソフトウェアが開発され、ワープロソフトで作成した文書に構造式やグラフをペーストすることも可能になった。こうして作成した文書をレーザープリンターから出力すれば、写植印刷した文書に劣らない見栄えに仕上げることができ、製薬企業の研究所では Mac を用いて非臨床試験成績をまとめる研究者が増えていった。

一方、臨床開発部門ではワープロ専用機を用いて文書を作成することが多かった（社員 1 人に 1 台のパソコンが貸与されるのは Windows 95 が登場してからである）。しかし、ワープロ専用機では満足な図を作成することができず、図が必要になると、手書きで作成したものを外部に委託してトレースしてもらう必要があった。このため、臨床試験成績に関する申請資料は、ワープロ専用機で作成した文書とトレースした図を写植製版システムに取り込んで印刷せざるを得なかった。

ここで問題になるのが承認申請書添付資料概要、いわゆる概要である。2004 年にコモンテクニカルドキュメント形式での申請が義務化されるまで、概要は品質・非臨床・臨床に関する成績を 1 冊にまとめるようになっており、臨床部分を写植印刷する都合上、品質や非臨床の部分も製版システムに取り込まざるを得なかった。当時、国内大手の製薬企業の多くは、印刷を受託する関連企業を抱えていたものである。

この場合、MacWrite や EG-Word といった Mac 用のワープロソフトで作成された文書を他のシステムで開くことに問題はなかった。文書を変換するためのコンバータが存在したのである。問題は文字化けである。当時はフォントのコード体系がオペレーションシステム間で大きく異なり、文字化けは現在よりも頻繁に生じた。このため、概要を作るときには、研究所から電子メールで文書を送信してもらうだけでなく、Mac から出力した印刷物を社内郵便で送ってもらう必要があった。そして、郵送された印刷物と製版システムから出力した文書を比較することによって文字化けを探し、校正時に修正したのである。

ほとんどの場合、文字化けは意味不明な記号として出現するため、発見するのは容易であっ

た。しかし、簡単に発見できない文字化けが 1 つだけ存在した。それはマイクロ(μ)である。不思議なことに、Mac 用のフォントで μ を入力すると、製版システムや Windows 搭載機では、「m によく似ていて、m と勘違いしやすい文字」として出力される。したがって、 μ g が mg と誤認識される恐れがあり、これはこれで意味が通じてしまうため、 μ の文字化けは徹底的につぶす必要があった。

この作業にはかなりの集中力が必要であった。申請の直前になると、臨床開発部門と印刷所との間で校正ゲラをやりとりする余裕がなくなり、研究所から送られてきた FD を印刷所に持ち込み、その場で出力された校正ゲラと研究所の印刷物を比較して文字化けを探すこともあった（「出張校正」と呼んだ）。当時は μ を見るたびに憂鬱になったものである。

(6) 強制終了

2000 年代に入るまで、パソコンはシステムエラーのためにフリーズを起こすことが多かった。ただし、Mac と Windows 搭載機とでは、フリーズ時にユーザーが抱く感情が大きく異なった。

まず、Mac では、正常な起動に失敗すると、泣き顔をしたパソコンのアイコン（通称 Sad Mac）がディスプレイに表示された。正常に起動できないのは CPU の能力不足が原因であり、本来は悲惨なことなのだが、作業の開始前なので実害が生じることはなく、ユーモラスな Sad Mac を見ると、こちらも「許してやろうか」という気持ちになったものである。実際、Mac ユーザー間では「Sad Mac が現れたら、まずはカメラで撮影し、それから再起動する」といったジョークが交わされていた。

次に、作業中にシステムエラーが起これると、爆弾のアイコンとともに「システムエラーが起きました」というメッセージが表示され、再起動が必要となった。保存していないファイルは再起動時に失われるので、こちらは実害をもたらすのだが、爆弾は「パソコンだってこんな事態は予期していませんでした」という印象を与え、ユーザーの怒りを抑えることに貢献した。

対照的だったのが Windows 搭載機で、起動時のシステムエラーは少なかったものの、作業中にフリーズすると、「このパソコンは不正な処理を行ったので強制終了されます」というメッセージが表示された。当然であるが、フリーズはシステムエラーによって生じるのであり、ユーザーに責任はない。このため、傲慢極まりないメッセージはユーザーの怒りを増幅させることとなった（火に油を注ぐとはこのことである）。あるコマーシャルでは、ディスプレイに向かって「私は不正な処理など行っていない」と髪を逆立てて怒る女性が登場し、多くの共感呼んだものである。

現在、パソコンがフリーズすることは減多にない。仮にフリーズしても作業中のファイルは復元することができ、1990 年代と比べると被害は小さくなっている。にもかかわらず、いまでも私はこまめな上書き保存を繰り返している。フリーズが頻繁に生じた時代に染みつけた習慣が抜けないのである。それくらい、「不正な処理を行った」というメッセージは大きな後遺症を残した。この

メッセージを知らない世代の人たちは、現在、どれぐらいの頻度で上書き保存をしているのでしょうか。